ヨスキツネ
ボードツ
ススメ
R-18
Adult only

――どうして……
……。
どうしてこうなった――！！

約2時間前

うおおおおおお！！！

コックリさん大声出してどうしたのです？

まったく…朝から煩い駄狐ですね。

こ、これを見てくれよ…

プル

プル

ジャーン！

チラシ

チラシ、でせうか？

そうなんだよー！近くに10階建てのデパートがオープンするらしくて地下にはでかくてめちゃくちゃ安いスーパーもあるって！

ーケット

(金) NEW OPEN

オープンタイムセール12時まで！

なーカプメン1つくらいなら買ってもいいから一緒に行こうぜタイムセール！

おーん様限定品もあるしな。

←期待の眼差し

行きたいのは山々ですが どうせコックリさんは 学校をさぼらせて くれませんよね？

ふむ……。

じっ

これオープンセールは 12時までと書いて ますよ？

え、マジか？！

他をあたってくだせう

私もぐちゃぐちゃ学校サボります♥

しゅん

うっ…確かに 学校をサボるなんて 駄目だ……

胸はもう無理。

でも他に暇そうなやつ なんて居な……

ふわあああ（あくび）

ボリ

ボリ

ん？なんだよ？

いた

ぬー

…というわけなんだよ。お前暇だろ、付き合ってくれよー。

ふーん。

別にいいゼー買物付き合ってやんよ

本当か！

ただし……

！

ボフン

女体化、な？

ニヤ

ニヤ

ニヤ

プル

プル

あ。またしてやられた

そして現在に至る

なにかしたら承知しねいからな！

フンス！

ニヤ

ニヤ

なにもしねーよ。

そーっ

たぶん。

ニヨ

お、あれがそうじゃねェか？

ドドーン

うおーー！すげーーー！

！

クイ

…っと

信楽、早く行こうぜ！紅白饅頭無くなっちまう！

――まったくこいつァ……
わかってててやってんのかねェ……
へいへい。
やべー ティッシュ安いっ
いやちょっと
買い過ぎだろ。
ジャリ
ふぅー 買った買った！
ドーン
エリー エリー エリー
なぁ。一本だけ いいだろ？
……一本だけだぞ？
ぐいっ
んなっ？！
そうだぜ 椿ちゃん♡
おじさん達 恋人同士なの？
うぅ～… 腰痛ぇ……
ふふ♪
セールだからって 張り切り過ぎだ。
じいさんなんだから。
あそこのベンチで 休もうぜェ。

おじさんちょっと喫煙所行ってくるわ。

おぅ。早く戻ってこいよー

ん？

そういえばここの階は女性服売り場だったな。

へぇー どれも可愛いな

わぁ…！

このワンピース凄く可愛い…！

でもこういうの着ても褒めてくれるのは信楽くらいだしな…

…って

なんでアイツが出てくんだよっ大体俺は男だしこんな可愛い服なんて…！

もじもじ

あの…すみません

はい？

うおっ？！

（い、いつの間に後ろに…！）

お客様そちらのワンピースお気に召しましたか？

わぁ

お客様とっても美人ですね！

モデルさん？

今お持ちのワンピース可愛いですよねー！この春の新作なんですっ

よかったらぜひご試着くださいませ♥

い、いや俺はその……！

さぁっ！遠慮なさらず！

あうう……

あ……

ちょろい。

じゃあ少しだけ……

あの…
着てみました…
まぁ…！
カアアア
ちょっと胸が…
きつい…かな…
ナニゆん♡
お客様…
よくお似合いです…
はぁこ

ワンサイズ上です！お客様にぴったりかと！

早っ。

シュバッ

どうぞごゆっくり！

ニャッ

は、はぁ…

はぁ…。

面倒な事になったな…信楽が帰ってくる前に終わらせねぇと…。

—あいつ…なんだかんだで今日は大人しかったな。いつもこうだったらまた2人で一緒に出かけても…

よぉ狐ェ。

え？

なっ

プル

なんでおまっ

なっ

プル

カアアア

いやぁ

ニャ

お前さんを探して声が聞こえたから覗いたらまぁ…良い眺めじゃねェか。

出てけへんた
ムグゥ?!
しぃ
店内は静かにしねェと駄目だぜ。
んんんっ!!
ぞくぞくっ
んぅ?!
どこ触って…!
ストストっ
やっ
い、いきなりなにすんだよっ
はっ♡
はあっ
いやぁ…こんな可愛い格好してる狐ちゃん見たら悪戯したくなっちまうって
す、すぐそこに人が居るんだぞ…!

狐が声我慢すればいいだけの話だぜ。
そ、んな…！
ムニィ♥
やぁあぁ♥
もうこっちは準備万端じゃねェか
ほら声出てるぜ？外のねぇちゃんに聞こえちまうぞ
ビクッ
んんんっ♥
ビクッ♥
ひっ♥あぁんっ♥
クチィ
ニチュ
ククッ
いつもより締まるな…この状況に興奮してんのか？
はっ♥
んなわけあるっかぁっ…

はっ・・・あっ・・・
セクハラしないって・・・・
約束した・・・のに・・・っ
お前のこと・・・・
少しは見直したって・・・・
思ったのにっ・・・

んんん？！

ビクン

ビクッ

ビクッ

やっ・・・・！
これいじょはっ・・・・！
あっ・・・・！やめ・・・・っっ！

ク4ュ

ハ4

ヌ4ッ

うう・・・・
ばか狸ぃ・・・

プル

あー・・・・・
流石にちょっと
いじめすぎたか・・・

スッ

まぁ、そのままだと
辛ェだろ・・・？
一回イかせてやるよ。

やぁぁっ…！イクッ…！

ビクッ

イッちゃっんぁっあッ

ビクッ

きゅん

きゅん

やっ…？！

最後までしないって言ったのにぃ…！

しがらきぃ…！

こりは…

だいたい察し

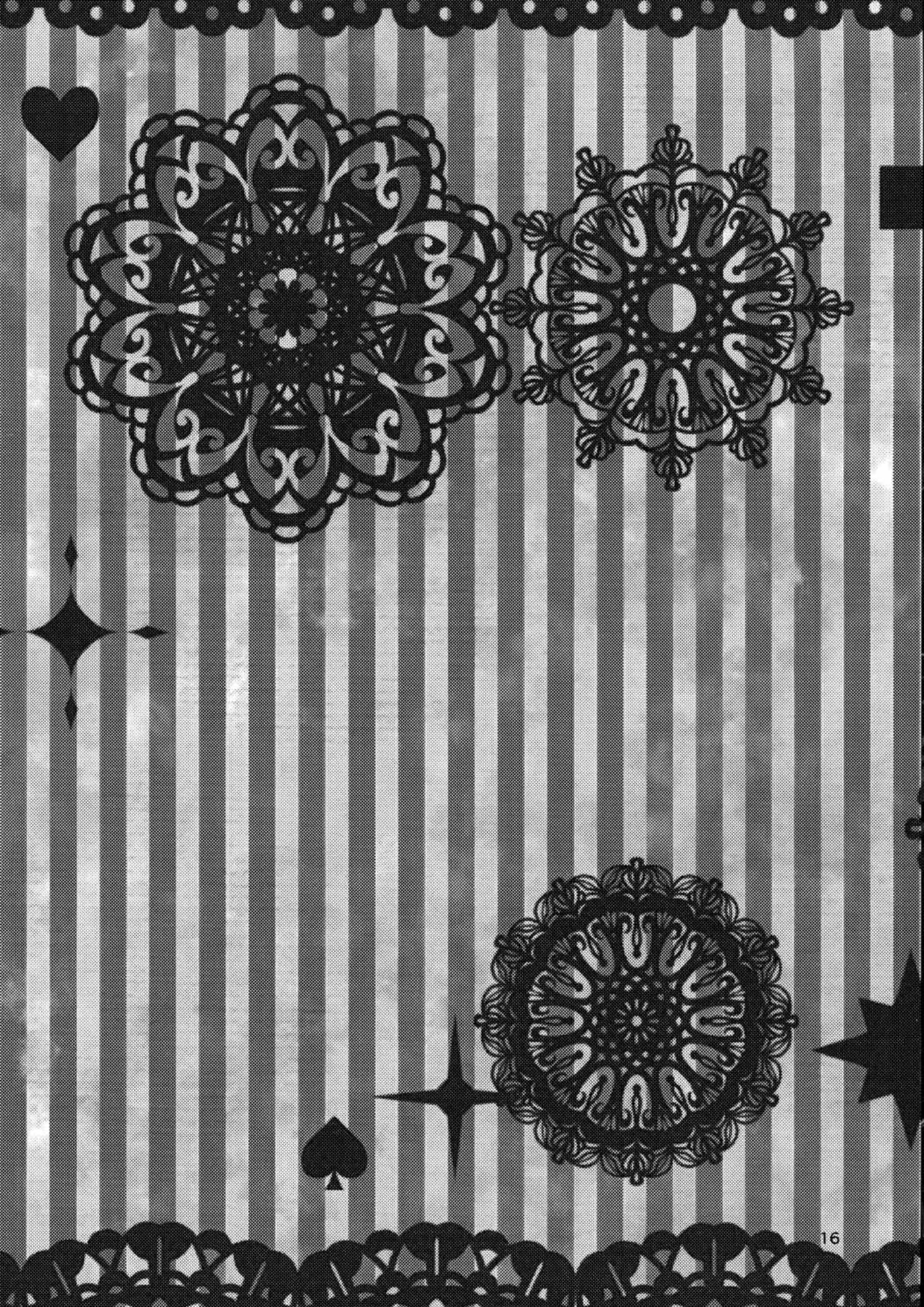
新品にしてはやたら皺くちゃですね

そしておじさんは何処へ？

ハッ

？

あいつなんかもう知らん



真夏の夜の花火

黒姫エリナ

「お迎えにあがりましたにゃー」

玄関からタマの明るい声がして、狐は着付けを終えたこひなの背中をぽんと叩いた。

くるりと一周すると赤い帯が金魚のようにふわりと揺れた。浴衣姿のこひなは無表情だったが、内心嬉しいんだろうな、と思った。

「悪かったな、タマ。わざわざ来てもらって」

「おやすい御用なのですにゃ」

狐のうしろに隠れているこひなを目ざとく見つけ、人形のように抱き上げてすりすりする。

「あーん、今日もこひなちゃんは可愛いですにゃん」

「あ。着崩れるからそのくらいで」

「はーい」

「じゃあ、こひな。タマのいう事を良くきくんだぞ。迷子になったらその場を動くな。知らない人にはついてっちゃ駄目。小遣いは、がま口の中。屋台で何を買ってもいいが、生き物は禁止。カップメンもだ」

「カップ焼きそ」

「却下」

「狐殿！　私めのお小遣いは？」

こひなの頭の上でわめいている狗神をつまみ上げ、三和土に落として華麗にスルー。

「忘れるところでしたにゃ」

タマが巾着から何やら小さい紙袋を取り出した。

「天狗殿から預かってまいりましたにゃ。……えーと、何

といいましたか、この家にダニのように寄生している博打好きで女好きで酒飲みで」

「口を開けば猥談、愛読書はエロ本と競馬新聞、人の財布から金を抜き取るしか能がないごくつぶしの信楽とかいう名前のくそニート」

「そのクズのお薬ですにゃ」

その時、廊下の向こうから、ぶへっくしょーい！　という盛大なくしゃみが聞こえ、全員がそちらをコキュートトスな眼差しで見つめた。

「代金は？」

「もちろん、七歳以下の可愛い少年のブロマイドですにゃ」

「はあ〜。何とか山本君に頼んでみるか」

門の前で三人を見送ったあと、狐は自室に戻った。

「ああ。まったく面倒くせえ」

ぶつぶつ呟きながら、狐は箪笥の奥から畳紙に包まれた淡い藤色の着物を取り出した。

信楽が寝込んだのは二日前。いつもの痛風だと高をくくっていたら、どこからか性質の悪い風邪をもらったきたらしい。本当に熱があるのだが、これまでに何度も煮え湯を飲まされた狐は、まだ九割九分ほど疑っている。というか、ヤツから最も縁遠い言葉は『信用』だ。

『……野郎はイヤだ。おじさんは、可愛い女の子の看病がいいよう』とダダをこねる信楽の口に、『いっつもお前の衣食住の面倒をみてるのは俺だろうが！』と灼熱のおかゆを突っ込んでキレた狐は、それでもこうやって女の姿に変化しているのだから、甘いと言わざるをえない。

姿見の前で、自分の姿を確認する。

「よし。かわいいぞ俺」

割烹着姿の狐が、こまごまとした品を盆に載せて廊下を歩いていると、遠くから太鼓のリズムが聞こえてきた。

今日は近くの山で縁日があるのだ。こひなを連れて屋台に行くという約束をしていたのだが、あの狸のせいで駄目になり急遽タマに応援を頼んだ。代理の保護者には信頼できる大人を選びたかったが、単に消去法で残ったのがタマだった……というのは内緒の話。

「おいクソ狸」

障子を開けると、信楽は布団の中で読んでいたスポーツ新聞から顔をあげた。当然、目的はスポーツではなく大人な女性で、文字ではなく主に写真だ。

「嬢ちゃんたちは出かけたのか？」

「ああ。タマに頼んだ」

「元気ならおじさんも稼ぎ時だったのに……」

「あぶく銭は身につかないって、何度言ってもわからないようだな」

狐は信楽から老眼鏡を取り上げ、おでこに手をあてた。

「まだ少し熱があるな」

「心配性だな狐は。明日には全快だぜ」

「ふむ」

ちゃぶ台には、空になった土鍋が載っていた。その横に盆を置いて、水の入ったコップと粉薬の包みを渡す。

「まあ、せっかく取り寄せたんだから、何か腹に入れて薬飲んどけ。りんごとバナナとどっちにする？」

「狐が食べたい」

ずとむ！　と見事なボディーブローが決まったあと、顔面にバナナが叩きつけられた。

はあ〜と盛大なため息をつく信楽をしり目に、ちゃぶ台を片づけていた狐は、かけられた台詞に自分でも信じられないくらい動揺した。

「ずいぶん懐かしい着物だな」

「……覚えてたのか」

「おじさん、美人は忘れないのよ」

「そういう奴だよ、お前は」

「残念だな。その姿のお前さんを連れてお祭りに行きたかった。いやあ、野郎どもの羨望のまなざしすら心地よい」

祭りとなると、的屋に身を変え荒稼ぎする生臭坊主が何を言うか、と睨みつける。

粉薬を飲み下した信楽は、しばらくして首をかしげ、もう一度水を口に含んだ。

「……何を飲ませた？」

「天狗の薬だよ。タマに届けてもらったんだ」

「なるほどな」

天を仰いでから、額に手を当てる。

「大方、熱冷ましじゃなくて『元気になる薬』とでも所望したんだろう……まいったな」

ちょいちょいと指先で呼ばれて、狐は近づいた。

「どうした？」

「悪いが、これはお前さんにも手伝ってもらわねえと治らねえ」

「何をいっ」

言い終わる前に、首の呪いの鈴が落ちて音を立て転がった。強く手を引かれた狐は、気がつけば信楽に背を預ける格好で抱きすくめられていた。頬を撫でる奴の手がさっきとは違い、尋常でないほど熱い。

「おい。一体これは」
「おじさんの熱さまし」
「元気になるって、そういう意味か！」
「付きあってくれるよなあ、狐よ」
左腕で狐を抱きしめたまま、耳元にささやく。
「……本当に薬のせいなんだろうな？」
「さあ、どうだろう？」
「お前！」
腕から逃れようとして暴れていると、髪を分けたうなじを舌が伝った。
「あっ」
強く噛みつかれたその隙に、脇から忍び込んだ手の平が胸をやわらかく揉みあげる。
熱い。
「……やっ」
「女物ってのは、こういう事ができるから便利だな」
せっかく着たのに……。
「やめろ……着物が汚れる」
信楽は、自分の手首をつかんだ指が震えているのに気づいた。
「わかった」
手際よく帯を解かれ着物を剥ぎ取られた狐は、さっきまで信楽が寝ていた布団の上に転がされ、信楽の背中の刺青をぼんやりと見つめた。
いつ彫ったのか、どういう由来があるのか自分は知らない。それと同じく、その着物を誰からもらったのか、自分がそいつをどう思っていたかなど、信楽は知る由もない。
「脱がせる過程も大事だが、目の前の据え膳も大事だ」

自らも着物を脱ぎ捨てた奴が、布団の中に入り込んできた。

「ひょっとしてけっこう乗り気か。狐よ」

「ンな訳あるか。一人で慰めてろバカ！」

「おっと」

白い手が近づく信楽の顔を我武者羅に押しのける。

「離せ。汗臭い」

「そりゃいいや。二人でいい汗かいたら、一緒にお風呂に入ろう」

逃げようとした狐に足を絡め、その身体に乗り上げる。

「……そろそろ本気で辛い」

真上から苦しそうに呟かれて、顎に手をかけられた狐は、きつく目を閉じた。

背中に回された手が汗で滑り、爪を立てながら我武者羅にしがみついてくる。首筋に張り付いた長い髪にそそられ、肌を何度も味わい噛みつく。

「やあっ……あ」

痙攣が始まり締め上げられるのにも構わず、突き上げていると、達した狐が大きく背を反らした。そして彼の最奥へ放つ。気が遠くなるほど気持ち良かった。

「……しがらき……しがら……」

がくがくと身体が揺れ、力を失った彼の両腕が落ちる。

「……は」

短く息を吐いた信楽は、火照った身体に彼を抱きしめながら、かすかに音楽が聞こえてくる外へ目をやった。布団の上に長く伸びていた障子の影もすでに消え、宵の口だ。

また熱はおさまらず、喉の渇きを覚えた信楽は、びっしょりと汗をかいた水差しを手に取ると直に麦茶を飲んだ。小さくなった氷がからんと鳴った。

「……具合が悪いのに無茶をする」

乱れた髪をかき上げながら、面倒くさそうに狐が呟く。

「具合が悪いから無茶をするんだ」

「なるほど」

狐の手が水差しを取り上げ、喉を上下させながらごくごくと嚥下する。口の端からこぼれた滴が喉を伝って豊かな胸元を濡らした。普段からは考えられないくらい、しどけない姿だ。

こいつのこんな姿を見るのは初めてだった。

口の形で「足りない」と呟く。布団の隙間から、なまめかしい白い足が見えた。信楽の放ったものが溢れて肌の上を伝っている。

「俺もだ」

布団を跳ね上げ、足首を掴んで引き寄せ、音を立てて胸元にこぼれた麦茶を舐めとった。大きな胸に甘えるように頬を摺り寄せると、小さく身じろぎする。敏感になった肌に無精ひげが当たるのだと気づいて、信楽は容赦せず、更に口に含んで吸い上げた。

歯を割ると氷の冷たさ……いや。忍び込まされた氷を味わい、再び彼に返す。形を失い溶けてなくなる頃には、互いをむさぼる舌が熱く絡み合っていた。

「はっ」

甘い息を吐く唇をなぞり、乱れた髪を弄ぶ。すでに冷えはじめた肌は、手に吸い付くように心地よかった。

時の権力者が、こいつの身体に溺れた訳がようやくわか

ったような気がした。男を誘うような妖艶な身体に、時折見せる生娘のような甘い表情と声。絶品すぎる。決して男にはあらがえまい。

足を折ってゆっくりと、その甲に口づける。恥じらうように背けた顔を追い、無理やり口の中に指を入れると柔らかい舌がねっとりと絡んできた。

「…う」

両足を高く持ち上げ、浮いた腰の下に枕を引き寄せ、たっぷりと濡らした指先を侵入させる。すべてが晒される体勢に、狐が激しく首を振るのも構わなかった。

「やっ……だ……見る……な……」

古ぼけた扇風機の音に、いやらしい水音と熱い吐息が混じった。

それらすべてを、腹に響くような轟音がかき消し、障子にかすかに赤みがさした。

信楽の頭の中がスパークした。足を割って腰を落とし、泣きじゃくる彼の身体に乗り上げる。

「ああっ！」

背骨が軋むほどの衝撃を受けて、すがる事もできない狐の腕が、むなしく空をさまよった。

その手を取って、音を立ててしゃぶりながら、更に体重をかける。

「あっ……やっ」

何度目かの轟音が響いた。

激しく貫かれながら、触れあっている肌が互いの汗で滑り、気が狂うように熱かった。

「ふっ……」

解放されたと思ったのも束の間、そのまま両手をつかさ

れうつ伏せになった背中を、信楽が覆った。腰を強く掴まれ、叩きつけるように何度も奥深くまで食い込む衝撃に、狐は枕を抱きしめて必死に耐えた。

「……っ！」

痙攣する身体の中にどくどくと注ぎ込まれても、信楽の動きは止むことなく、狐はそのまま白い闇に飲まれた。

目が覚めた時も、奴の腕の中だった。

「よお起きたか」

風呂場だった。かろうじてそれだけがわかった。自分に降り注ぐシャワーのぬくもりが心地良い。

「ちょうど沸いたところだ。立てるか？」

首をふると、ふわりと抱き上げられ、湯船の中へ沈められた。

「風呂の中で寝るなよ」

そう言い残して、信楽は扉の向こうに消えた。

自分の両頬をばしっと叩いて、狐は何とか意識を保とうとしたが、まだ夢心地だ。体中が痛くてさすっていると、赤いあざや噛み痕が肌のあちこちに残っていて、それをつけた相手やその時のことを思い出すまいとするかのように、ばしゃばしゃと水音をたてた。

「……っぶなかった」

もう少し目を覚ますのが遅かったら、眠ってる狐を襲って、五ラウンド目を開始するところだった。さすがにそれはまずい。

結局のところ、天狗の薬の効き目はすぐに切れたのだが、あの身体に歯止めが利かなくなったのは、信楽の方だ。

「傾国の美女に惑うとは、おじさんもまだまだ修業が足りないな」

縁側に座り、紙巻き煙草に火を付ける。

花火はもう終盤を迎え、去る夏を惜しむように、ひっきりなしに空に七色の光をまき散らしていた。

「綺麗なものには目を奪われるねえ。妖も人間も」

よろよろと歩いてきた狐はすっかり男の姿に戻っていて、無言で鈴を差し出した。信楽がそれを狐の首にかけると、すべて終わった。

隣に座ると甘えるように、胡坐をかいた信楽の膝に頭を乗せる。

「……のぼせた」

「長風呂すぎんだよ」

しばらく髪をなでていると、空へ手を伸ばして狐が呟いた。

「あんまり綺麗で涙が出そうだ」

「儚いな」

「うん」

「人の命みてえだな」

「……ああ、そうだな」

その時、玄関からこの家の住人の帰宅の声が聞こえた。

了

ここまで読んでくださりありがとう
ございました！
ググコク本は２冊目です。
今回もにょたで(´∀`;)
個人的に描きたかったにょっくりさんの
洋服姿が描けたので満足です！ るね

ヨスキツネ
デートツ
ススメ

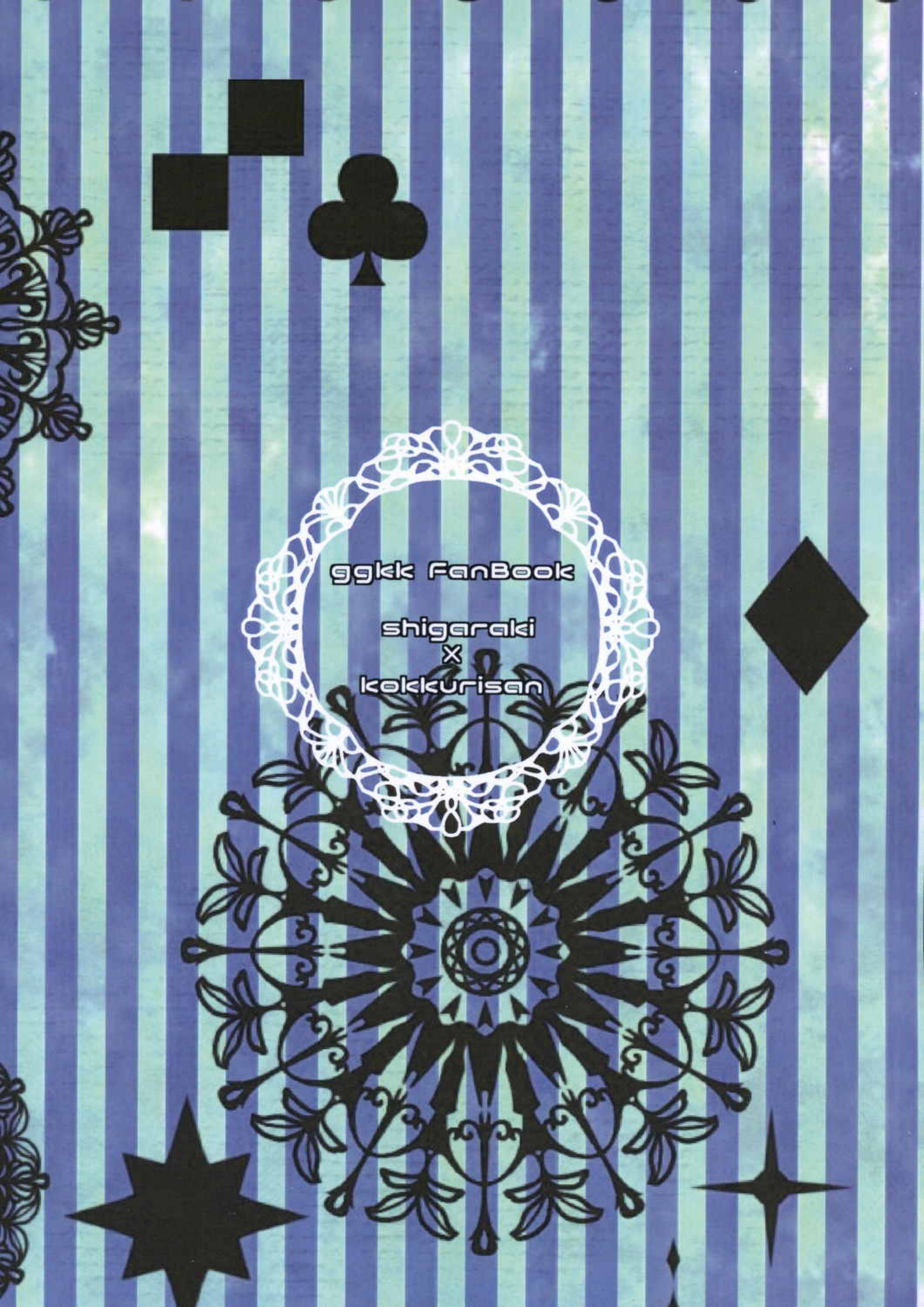
シノノメるね
2015/5/10 発行
印刷　オレンジ工房様

SpecialThanks 黒姫エリナ様

※無断転載、オークションなどへの出品を禁じます。

連絡先

runesinonome★gmail.com(★→@)
Twitter ID: ru__ne
Pixiv　　ID:736359


ggkk FanBook
shigaraki
×
kokkurisan